



西洋雜記卷之六

夢遊漫筆 第十卷

小東洋 夢遊道人筆錄

LINDTO.

西洋言語の説

萬國傳信記事みいそく 歐羅巴洲中諸國之此言
 語の原始およそ三種あり第一は「ラテロ」意太里亞の
中より 推
 都の語これ意太里亞・拂郎賽・伊斯把_ニ你_ニ亞_ニ等諸國の
 言語由て出る所なり第二は「アルマ_ニ泥_ニ亞_ニ語_ニなり」是
 和蘭・譜厄_ニ利_ニ亞_ニ・第_ニ那_ニ瑪_ニ尔_ニ加_ニ・雪_ニ際_ニ亞_ニ等諸國の言
 語因りある所なり第三は「スラ_ニホ_ニニア_ニ」公爾加里亞の内
に屬して今も

入尔馬泥亞亞帝
箴の所郡たり

語なりこれ博厄美亞翁加里亞波羅

厄亞莫斯哥未亞等諸國の言語由てある不なり

とり

按て右に海峽「ラテン」語にて「メル」とり「拂郎察」

「メル」とり「伊斯把你亞」を「メル」とり

書籍を入尔馬泥亞を「ブエツク」とり「和葉」に

ては「フツク」とり「テ」那瑪尔加めても「ホツク」と

り「語厄利亞」とり「右の如き」異なり」とり「と」も「地

原をこな土地にありて一轉音の「曾」入尔馬泥

OTDIO

亞那瑪尔加の語を以て和蘭の語に參考す

るに其語多くハ相似たり「語厄利亞」の語を指異

かしてこれ等に同「か」さる事多「語厄

利亞」其歴世の沿革にありて其語音もま

志を「變せ」る「西書」に詳なるこれ等の事

「考」る「不」なり「和録」を「考」る「考」る

とも「尚」稿「知」曉「する」事「得」ず「他日」これ「を」詳「に」

「故」に「此」書「に」は「これ」故「を」其「大」元「を」説「め」

「ヘ」ブレウス「文字」の「説

「ヘフレウス」の言語を西洋諸國の言語皆由てお
 る所の者なりまゝ「ヘフレウス」の文字と稱はる
 者まゝ和蘭諸書中に散見をその字体最簡右を
 り是西洋諸國の文字の中に於て最古文と稱相
 傳ふ太古の世に天より此文字を造りて人に授け
 らる所の者にして則ち洪水初巻の見の時より以前此
 文字なりとしふまゝ「ハツクホルド」が撰る所の
 字學正訓にりまゝ「ヘフレウス」の文字喉舌齶齒
 唇の五音を區別して五種となしとる二三枚左

に記し尙萬國字類の中にこれと辨む

リ 「ラゲツゴ」
 とよむ
 コ 「バルデス」
 とよむ
 コ 「子アエリエ」
 とよむ
 コ 「カルコム」
 とよむ
 コ 「シイエ」
 とよむ
 コ 「ハスレウス」の字ハ歐羅巴と異かして
 右より左よむ

大抵是等の類なり

「アフラサダフラ」の竹符花血痢及び熱病を

除くもの

「ボイス」が學藝全書および「ウライツ」が醫學室
 函に載めりまゝ「アフラサダフラ」を秘術の呪語

硝子城意の時をその素なること蠟^{ロウ}河^カを
白聖の如くになる之世時に人そ乃心此致する如
くい律の形になりとも造^{ツクリ}を而後これ城水中に
投^{ナゲ}きぬハ聖きことま^マ初^{ハジメ}の如くとりふ○硝子ハ
和蘭語「ガラム」とりふ「ラテン」めてハ「ヒイトロ」
とりふ我邦めてヒイトロとりふハ此「ラテン」語
乃轉音なり又按するに西洋に硝子城造る
ト原始きめて久し則ち太古洪水よりも
以前よりありて罷^バ鼻^ビル乃高臺城建し

屯^ツに多く処^{トコロ}硝子城用ひし

屋室^{ヤシム}揚糞^{ヨウフン}の説

歐羅巴洲も人家なる石城以て造建^{ツクリ}故に火災絶
て稀なり其木のみ城以て造る者下賤^{ゲン}乃家な
りま^マ彼方^カ廁糞^{リフン}を掃除^{ソウジ}するには如^{ごと}な^{ごと}夜を以
てして白晝^{ハクシツ}天日^{テンニツ}の光^ヒを^を不^ふし^しハ決^{けつ}して糞^{フン}を掃^は
ふことな^ら故に和蘭語に揚糞^{ヨウフン}人を謂^いて「ナクト」
ウエルケル」とりふなり「ナクト」ハ夜なり「ウエルケ
ル」は業^{わざ}をなす者^{もの}と^し事^{こと}なり

西洋梅毒の説

和蘭語に梅毒を呼て「スパンス・ポツク」とりふ
「スパンス」ハ伊斯把亜回なり「ポツク」もまた「
瘡」也りふ施瘡キレテル 是れ其いかにとりふに昔時歐
羅巴洲諸國には絶て此病なかりしに伊斯把
你亜必よりフロムボス 閣龍「イタリヤ」の人も伊斯把你亜王の臣に
其るふ巻に 始免て亜墨利加洲を関きし時其
これに相考ぐひて亜墨利加にりしをたす軍卒
等多く彼地に終る此病也患ふ國に傳りて

伊斯把亜の地に此病傳来しそれより他
歐羅巴諸國に伝傳せし故なりとりふ

其傳来の始末西史および彼邦の醫書に詳し

西洋産婆の説

和蘭に産婆を謂ふ「フルラド・フロー」とりふ
ラテン語に「ハ」オスステリキス」とりふこれ
此方及び支那より産婆とを甚異なりと此
「フルラド・フロー」となるの女を少き時より終
身不控にして種々の戒行を保ちて危の如く

なる者なりとり不蓋一一生を重んず一母を防く
の意あり一

嵐及風城作乃説

奇方秘苑にいとく汚れし者汗衫城交を積した
る中に虱けを時を歴く愛しと嵐となる人汗衫
乃最汚れ且汗に染しし者と地に置き上土城覆ひ
て日光城交をわぬばその土上皆氣城生すと云ふお
もふよこの蓋一なる理を示すが為に記すも此
之嵐と虱とは人の最嫌ひ惡むべき者なるに

これと違ひし何よりせん

謹談

彼方謹談の類まゝこれ何れを今その一二條を左に
記す

一處子何れ夫なくして孕めりける人これと語
るいそく姐く誰人と私情を通しと志加るや答
ていそく並り私情あるるに一曰則ち夫婿か
くまゝ私情なくしと何物以て孕めりや處子
のいそく時く「ナクト・メルレイ」何れを豈これに感し

て然る者なりん
「ナク」を夜なり「メルレイ」は牝馬なり
二言或合して夢に悪鬼を多くとらふなり
いとくこれ「メルレイ」め
「ハ」は「ヘ」ダスト
「ハ」は「ヘ」ダスト
牝馬なり

一酒徒有り酒を嗜むことの甚しきに因て其
眼疾患ふ醫者「カルトウア」なる人これといし
め「いそ」は是下の病をもと酒のなを不ちれば
宜く何れ禁ずべし酒徒者といそく我酒を飲
めを果して我眼を損を志うれども酒を飲ざる
ときも寂實になんべし我身を損に寧にな

る窓をして閉塞せしむるも大なる害を
壊損せざるにむるや致するのみ

薬切服せずしてよく飲食をまむむ方

奇方秘苑小いそく九食飲を失ふ者多くに
男乃敗壞するに因て而後よく他乃諸病を
生むりにいそくこれをもと治し易かざるの症
みして如如くならるときは居恒睡に就て食する
る所をいそく候めを多しと豊饌美時を對に
とりとも亦これを厭ふ意有り強き食へを

かあふに多くは吐逆をも者あり予が一親友曾く
一乃園園城管まる醫官の許み赴て奇異非常
みして平生いまく曾く識らざるの薬草を觀
る事甚多し此時に於て常に所有の草より
一種の甚く馳く功ある事知れりとりよその
園の園丁我友を導てその貴重なる苑園をより
悉くか觀せしめあるに因り我友ゆるにのそとく
これに謝するも賃を以てせしけは彼園をき一箇
の秘事薬を用ひずしてよく飲食をまむる

の法を傳へたりこれいふとなれ此時に我友人救
日いふより飲食曾てま、満さるの症得て悩む
よ因り此事彼園丁に知りしに園丁すあを
ち茵蔯草を兩年掌み捧きて來りて曰く此
葉を莫大小乃中おらば履裡足蹠乃丁にりれ
く而して毎粒その新ある葉をしきかして初の葉を
除くべしとくば則よく食することを得べしと
友人こきに従うひく右乃如くせし果して平
癒せりその後いくもなくして予もま

此症ひを患ひて諸食物を吐てをまずと一温
なる食物の香を嚙むが忽ちに嘔吐或催まに因て
偏く此等致彼友人に問ふに友人乃曰く此
一方信するは是れざるが如しと之も我さきにか
園丁より此方を受け用ひてをてに病りて知を
得るとなれをまはこれを用ひ試むと一とり
小固く予すなち菌藻を採りて其葉を莫
大小乃裏ぬりぬ毎日葉を換てこれを試むる
九二日有餘にして病全く瘥と食する事二人

致あるに至るすなち知るこれ真かたはこれ
なる経験乃良きなりと且これを行人ふこともま
甚容易に菌藻草の如きも都鄙を論じり愈
随ひて之な多し得しとる候と起る前に葉取
ることもなく且諸貴重なる健胃乃薬物に採
等乃貴品を重價を以て購ひ求むる及て此
容易なるは以て其いしる食欲を元め復する
こと豈一奇快か何れも予すてにこれよりして
後を恒め志をくこれに以て功成養するに由る

一二乃親友か此法を教ゆるをきくめきくてハ皆芳小
て信とすとりとも試して後は大に知を得た
りとも感謝を受くる多うりて

薔薇びい 法ほ 香か 官くわん 嵐らん なるなる 法ほ

同書に曰く予が友に一園丁を曾て把理パリス斯ス 寮寮 四四
乃都の地に旅行するに因く予これに贈るにまこし
乃旅用の貨を以て在園丁をなまちこきり
報するに薔薇を以て太芳香ありてむる乃法を
傳へしとすも乃法なく薔薇樹乃附近に於て葱と

土中に挿入するのその薔薇樹株乃多少なり
考くうひて葱もまきこれに葱して多少なり
志かると此を薔薇と非常乃芳香なり其花
より採る所の露まきと名なき香官嵐なり且
葉用に入ると功最大なるを以て製薬家殊々好
むるこれを購ふなり

卯中に文字成書するの法

同書にいさくこれハ戦争乃時節に何れも遠
方へ秘事伝告人とするにこれ同乃道路を敵人

阻絶して行へて信を通し切らざるに用ひ
所も此なりその法没食子と明礬とを酢めて
とじて印の殻上に字を書しよくこれを乾
かす其後三四日おろしこれ法より酢乃中
投し而後にかきこれを乾かして遠きに送る途中
より人これを見るとも放て知らずなり彼方
送呈到らば及て彼も印の殻を去れ白上に文
字の事し事辨む又明礬没食子は酢
殼より殻上より書しよくこれを乾かして而後

其印を鹽水中に投して煮る一時 此方の 事時 を か は
そのハ殻上此字を消散して中の白字を去る
又一方新なる印をや久しく酢乃中に投しかけ
ハ殻を去らば此時「ラ」セ「ワ」カ機を以て長く
是を裁して其中に小紙を納る酢を以て
しおけを印再び堅し印のきれは石灰
まゝハ端を以て塗る心し志くれども塗る所
はれを自分より其易し

石水に文字をなす法

同書にいと一ツの石を採りよくこれ紙の
 蠟を溶して其上に字を燻書しこれを強き酢
 乃中に投するなり十二時けあのあつて石紙取出し
 その上なる蠟をこそけ落せば字石上に存し
 巧く堵すとよし拙すに草亦子にいとく龜尿可以和墨
寫字入石と貝原大和本草附録に此説を
のせて日本にて昔佛經を石に書く其文字久しく脱さるこの法
なるといふ今もその名は本朝食鑑に龜尿紙取る法漆盆上に至
て鏡を以て照らし紙紙照せしむ一説に蒼耳子油を以て墨をより文
字を書せば石中に入り長く脱せざれ或をいとく芸香を油かりれ
蛤粉の末をまじり石に書を脱せざると云
其事猶相似し故に此に附記す

其の金の量と重しとる法

同書にいとく新なる馬糞を採りその汁を
 搾出しこれに黄金を投して而ほこれをおこ
 ばすなまじ其量よく重くなるなり
 狸の紙紙染る小虫の紙
 狸の紙を「コシ子ル」といふ小虫をとり免す此
 血紙以て條成す不乃を紙なる今西書所載
 の説を採り左の翻譯しつて以て考證にそふ
 不

「ウライツレ」が「酸」字函めいとく「ウライ」語コシ子ル

ラ^レ又「コシニルラ^レ」とりハ和蘭にこれを「コシセ^レリ
サ^レ」とりハ其形小にして扁平・一片三角ある
以て四角に分れざる顆粒をなす外面を銀色
ありて裡面を赤く伊^ス斯把^バ你^ニ亞^ア國より人多く
西方亞墨利加洲より得來る其物多く無花
菓樹に附くペリウ露^リ國亞墨利加の中に在る大國にして
伊斯把你亞の屬也
の人心を用ひてこれを採取すま^ル諸^ノ厄^ノ利^ノ亞^ノ國
の人「テイワ^レ」がいまく「コシ子^ルラ^レ」を則小虫の一
種ありて無花菓樹の葉に附して生ずるといま

生藥鋪中これと分て四種とす其第一を
拵^シ部^ノ寮^ノ國^ノ人呼て「ラ^レ・コセ^レニ^ル」・ステ^レク^エ」と
りよ^クこれ則ち我輩恒々多く見らる所の者な
る第一を「コシ子^ルラ^レ」・カムペ^レニ^カナ^レ」と名く上
より第一種の物に比すれば粒々^ニ裂^レり塊
状なり色を他品より最も赤くして且不
潔なる者多くその中に雜るる者三を「コ
シ子^ルラ^レ」・テ^レト^レカ^ツラ^レ」と名くこれを平地に
産する所なる者にして多く「カムペ^レニ^カナ^レ」
詳末

の下に於てこれを得る多量は第4を「ウヰルデ」
コンシ子ルラ」と名くこれハ大葉乃地榆本根
純下に於てこれを得るなり凡右の四種乃
内かゝハ第一種乃者此以て上好の品となす
藥局中これ以て「アクワア・ヒツタ」の薬名を
製し或は胃の病に用ひるの薬あり其色は
ほちて赤かゝり又小本は通するの良薬と
其條迄を專らこれ以て用ひる種と乃段足
乃類を條する事なすと

再按「カムベシカナ」を樹乃名之多く北「ア
リカシ」の地に産じ以て染料となす

「コシ子ルラ」が萬國傳信記事にいそ「コセル」
又「コシ子ルラ」まゝ「コシニルラ」と名く其色赤
くして美藤を名これ則一種乃小枝の乾きて
化生する者なり其形「ウエヌク・ロイス」木虱の類
に似たりこれを壓して汁を絞り出す乃液汁を
條匠以て色染する所乃と乃此物多し
亞墨利加洲中に産す則ち其花葉樹り尚

たろ一種の樹上も附生す 亞墨利加の土人嗜唯
鐵を以て其樹下に布りて而して後に其地小
出故その上にこそが落せを則此出よと速に
死にとりふこれ加の世に名りて人の貴と重
き所所の「コセニル」これなりとるれども此物
持て亞墨利加の地よりその産するに何れ
いふとるれが「入ル瑪尼亞國中」ポレイゴニユムの
地「シント・ヤレ」とりける所の邊の樹下に於て一
種の赤くして大さ穀粒の物産す世に

これ地名と「ヨハンニス・フルウド」とりよこれと以て人
地証きて真正の「コシニ子ラ」なりと稱して買
易すけ赤き粒の如きも此をましく他物に何れ
この一種の虫也仰りこれと暖処に置て日光
受てむれば則ちよく生育して虫となる此虫
血の如くなる赤き液汁なりこれを以て絹帛
羊織等織様むましく都見格玉ありて亞爾默尼亞
玉乃人も「ポナルセ・ヨカテ」の地より多く
「コツキニス」一名「カルシ」ともり本書地樹するに地購ひ得
「コシニ子ラ」も似たる一種の虫あり

料多し「ブツク」を
布巾乃敷き
此汁に漬て製する者
なり

まゝ「ポイス」が学藝全書に按るに「コシ子ル

ラ」出其形半圓なるか如くみして其種類

ゆゑ多し一類も赤翅の上にたゞ二の黒

点なり二種も赤翅の上に長く白きすし

及び斑鳥なり三種も赤翅乃上に七つの黒

き斑点なり此種を「^{ニゲ}ニ利画」中に甚多

なり名けて「ユツフロウ」・「クウ」ともなり四種

等翅黄に赤五種も翅黒しこれ等もな翅

乃色及斑点を以てその類を分けるなり

とよ其書に起るなり載て他を畧に故にこれに附するなり

「ゴウデ・ヒツス」の説

「ゴウデ・ヒツス」和蘭語「ゴウデ」を金を一種の小魚とし

て清き湧き此中に生し形状美麗なり其背

を金色にして腹を銀色に両傍を赤色なり黒

き斑点皮上に散在し尾ハ幅廣くして金黄色

に其肉を炙ると味美なりとよ此方に

りふ所乃 金魚と稍相似たりふこ

則意蘭乃異草の説

則意蘭島東印度の大島の内崑崙崑崙嶺嶺を産す新葉より漬すを産す始むる地の

府城の近邊に一種乃大なる異草と産す此の

「スラタ・ヂスチルトリア・ミラボリス」と名く水を

傍より多く水を滴下して自分疑く桶乃如

きもれと成して曲りて下に向ふ其形角に似

たり其質ハ木皮に似る色ハ黧黒色なり

和

西

蘭乃人を名きて「ドイフルス・ボラム」とりふ

「ドイフルス」を鬼神「ボラム」を樹なり此其乃奇異なる「蘭」各つくる 此桶の如きと

其乃いま「熱せ」の同ハ上に蓋りてこれを

塞く熱せらるるびして人指を以て其上を壓く

口を閉く其容易なる其桶の如きもの中

ハとな水なり則乾く其熱飲む其水さそめて

清冷甘美なりよく心強くするの良薬と

工鄂國の奇鳥の説

亞非利加洲工鄂國に一種の異鳥と産す名ケ

て「エンチインデイ」とり其皮甚美にしとて
 班点あり此鳥恒に空中に飛翔しと云ふ地
 下はたに時ありて高樹乃上に止まるのみ若
 其地を下地を則忽ちに死す故に其地を
 もこれをを得る事ありて稀なりと其僧甚貴
 重なり王侯貴人のこれを得て服と成し
 其以下はく用事ありと云ふ事あり

西洋雜記卷之六畢

夢遊秘書

訂正增譯未覽異言

西洋雜記

翻譯海國度數記

同末編

翻譯大西要錄

重訂人物圖說

東西洋紀行志畧

西洋錢譜畧解

十二卷

前編 六卷

本編 一卷

三卷

一卷

一卷

八卷

三卷

伯西見
 支那
 印度諸國

西洋錢貨畧考

二卷

滿刺加字學畧考

一卷

明儒 萬國圖說考證

三卷

蘭學輯聞

五卷

西洋微號解

西洋雜記二編

奉教翻譯魯西亞國志

天保九年...

合六冊

之...

七七八

八五〇

Handwritten notes at the bottom right of the page.

